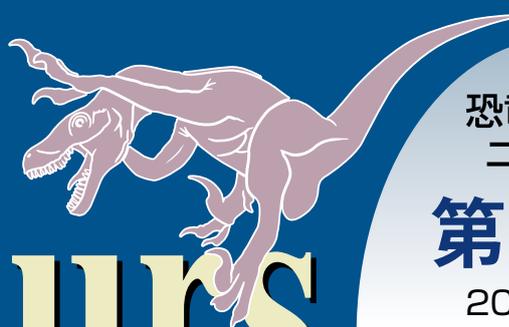


恐竜 Dinosaurs



恐竜博物館
ニュース

第43号

2014.12.9

福井県立恐竜博物館

特集：日本古生物学界の生い立ち⑮

- 目次 ▼特集：日本古生物学界の生い立ち⑮ … 2～3 ▼野外恐竜博物館の開館とその概要 … 4～5
▼研究員のページ「マゼランの名がついた二枚貝」… 6
▼Q&Aから「恐竜博物館をあまさず楽しみたいのだけど？」／
レストラン「恐竜の巣カレー」／グッズ「恐竜博物館カレンダー」… 7
▼2015年1月～3月催し物案内／図録案内 … 8



プロサウロロフス・ブラックフィテンシス

Prosaurolophus blackfeetensis

鳥脚類
白亜紀後期
アメリカ モンタナ州



新生代貝類研究と今後の展望

筑波大学名誉教授 小笠原 憲四郎

啓発を受けた貝類化石の研究

前回までと少し話が重複するが、1970年代以降貝類化石の研究を通して強い刺激を受けた研究を述べておきたい。東北大では増田孝一郎先生や野田浩司先生のイタヤガイ類とフネガイ類の分類系統の研究などに接し、いかに標本を多く観察することが重要であるか知らされた。分類形質の変異や類似種との比較を念頭に、ローカルな化石産地標本の収集観察に始まり次々と地域から全国規模へ、そして世界規模で標本類を比較検討してゆく専門家魂に触れさせて頂いた。これらの地道な比較研究が、種の時空分布を明らかにし、その起源と移動・伝播や種の進化過程解明に繋がっている事は言うまでもない。増田先生は1992年春に宮城教育大学を退官後、台湾大学の客員教授として迎えられ、台湾の第三系貝類化石の分類と年代を研究され、本邦と台湾の貝類群集の比較研究を行われた（写真1）。また私が学会講演や論文などで啓発を受けたのは、何と云っても東大の速水 格先生であった。速水先生は中生代貝類化石の記載分類等では要を得た観察・記載で、さらに個体成長や変異に関する集団標本の統計的扱いなど、すばらしい研究を展開された。加えて速水先生の



写真1：増田孝一郎先生の「台湾第三系貝類化石の研究」に関連して、先生がリーダーで実施された台湾地質巡検に参加した際の集合写真（撮影は著者、1992年12月台湾島中部の太極峡にて）

ヒョクガイ化石の二型現象を論じた進化論、さらに分断生物地理的考えを基本とし、同所・異所的種分化モデルでのピン首効果と遺伝的浮動そして隔離へと繋がる新種誕生モデルを通じて学んだ事は多い。また京都大学西村三郎先生の海洋生物地理学、九州大学の首藤次男先生のトーンソンの貝類幼生生態学や古生態学なども強い刺激を受けた。最近では本邦近海での深海性のシロウリガイ類など、冷水下での共生細菌による深海生態系の発見と、それらと平行しながらの本邦深海性化石群集の解明や存在意義の探求など、我が国を舞台に世界をリードする研究が展開されている。

啓発を受けた貝類学以外の古生物研究

私の研究対象とした第三紀層の対比と年代の研究では科研費の総合研究等を通じて多くの微化石、古地磁気学や放射線年代の研究者に接し、それらの研究手法や実用性など、大変頼もしく刺激を受けた。中でも産総研の柳沢幸夫氏の珪藻化石の緻密な生層序の確立や珪藻古生物学、岡田尚武・高山俊昭・佐藤時幸氏らの石灰質ナノ化石の基準面の確立などは日本の化石研究の実力を世界に知らしめたと思われる。また学界における恐竜や大型哺乳類の古生物学では、小島郁生氏や長谷川善和氏とそれらに続く多くの若手研究者の情熱には敬服した。さらに東大の花井哲郎先生や静岡大学の池谷仙之氏、東北大の石崎国熙先生とその門下生による貝形虫学の研究は、進化古生物学を実践する数々の斬新な研究で大きな刺激を受けた。加えて1980年代に大きな展開をみせた大場忠道先生等による同位体地球科学、郡司幸夫氏の

腕足類の系統分類と構造生物学、岡本隆氏や森田利仁氏の巻貝の形態形成に関する有限要素法や理論形態学、中森亨氏のサンゴの形態解析とフラクタル次元、北大の棚井敏雅先生のカエデ化石の分岐分類学による進化系統論やJ. Wolfe博士の全縁率を用いた本邦新生代の古気候復元なども、大いに刺激を受けた（写真2）。



写真2：左より石田志朗先生・Jack Wolfe博士・棚井敏雅先生と私（撮影は植村和彦氏：1992年8月、29th IGC, Kyoto）

文献と標本の重要性

東北大学地質学古生物学教室にはヨーロッパの古典的貝類学の古書を含め内外の貝類学に関する膨大な文献があったが、中でも矢部文庫と半沢文庫などの論文別刷集と、その後加わった畑井・浅野文庫などを頻繁に利用させてもらった。先人の研究者が必要に応じて揃えてきた世界中の研究論文等の文献の数々は、何とも言い難い宝物であった。貝類だけでなく、ある分野の古生物研究には文献が必要で、これらは数十年掛かって蓄積されてきたもので、一朝一夕には研究環境は作れない。今では古典的な文献もインターネットを通じて見られることも多くなってきたが、論文を手元に何度も内容をチェックする姿勢は大切にしたい。また貝類分類だけでなく分類全般では、種の同定の際にタイプ標本を参照にする事が必須で、さらに類似・近縁標本と比較する事で、種の特質を捉えるのが基本だろう。この同定の際に、

The database of Japanese fossil type specimens described during the 20th Century. Spec. Pap., Palaeont. Soc. Japan, Nos. 39, 40, 41, 42 (2001-2004)

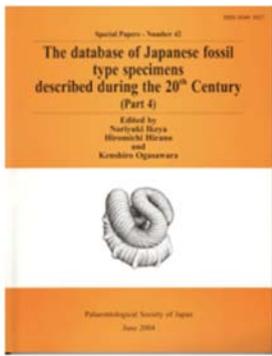


図1.日本古生物学会特別号「20世紀に記載された日本の化石タイプ標本のデータベース」

手元に多くのタイプ標本や比較標本が揃っていることも、研究を進めていく際に大変有意義である。伝統校や同じ研究分野の専門家がいると、これらの文献と標本、そして問題点などに直接的に触れることができる。私自身、21世紀を迎えるに当たり計画された「日本の化石タイプ標本のデータベース」のまとめに参加出来、その成果が日本古生物学会から刊行された事は幸いであった(図1)。さらにこのデータが産総研と学会の協力で、現在ではインターネットを通じて自由に利用できる状況である。古生物学の基本は「生物進化」と「古環境」の解明であり、先人の学術遺産ともいえる文献と標本を参考に、多くの方々が個性を發揮した研究に取り組んで頂きたい。

新生代貝類化石研究の文献と日本貝類学会

古生物学に興味をもつきっかけは、人それぞれであろう。私の場合は化石採集などの面白さが先で、後で勉強をはじめたように思う。しかし、ある本や図鑑などに接して、化石研究に目覚めた方も多い。化石の一般的な入門・普及書はさておき、新生代貝類化石の研究で大きな影響を受けた論文や著書について触れたい。

日本の貝類学研究に関する研究全般は基本的に日本貝類学会によって推進されてきた。日本貝類学会は1928年に滝庸・滝巖氏兄弟等の協力で創設されて以来、貝類の生物学全般にわたり多くの専門家が研究活動を行ってきた。我が国の貝類に関する平瀬与一郎・黒田徳米・吉良哲明・波部忠重・

大山 桂などの偉業は「日本の現生海生貝類チェックリストと文献」(英文: Kuroda and Habe, 1952) や肥後(1973)による「日本列島周辺海産貝類総目録(397pp+索61pp)」などでよく理解できる。特にこのチェックリストは日本の現生標本に基づいて記載分類されたヨーロッパ等の古典的原本を網羅して、本邦海産貝類4395種の分類学的整理を行い、さらに個々の種の地理的分布をまとめたものである。これによって現生種の緯度的分布や深度分布などが整理され、結果的に新第三紀の貝類化石群集に基づくHDM特性曲線(伊田, 1959)など、古水温推定などの合理的な解析ができるようになった。

現生の貝類学解説書や図鑑なども多く、身近な出版物となっている。近年になって韓国やフィリッピン、ロシア極東などの貝類図鑑なども出版され、加えて奥谷喬司先生などによる新たな貝類図鑑の出版など、日本近海の貝類学に関する文献は一段と充実している。

一方新生代貝類化石では、アメリカ地質学会が編集出版したTreatise on Invertebrate Paleontology, Part N, Volume 1 and 2 of 3 Mollusca, 6. Bivalvia (1969, 953 pp+38pp.)は必読の教科書であった。日本の新生代貝類では榎山次郎による横山又二郎の記載種のレビュー(日本古生物学会特別号no. 3, 1957; no. 4, 1958; no.5, 1959; no. 6, 1960)と、大山・水野・坂本(1960)の日本の古第三系貝類図録、さらに大山 桂による横山又二郎の関東地域の第三紀・第四紀のタイプ貝類のレビュー(日本古生物学会特別号, no. 17, 1973)などに

より貝類化石研究を加速させる礎となった。さらに前回述べた総合研究や共同研究、また貝類化石研究者の退官記念論文集等などの刊行で、日本の新生代貝類化石は大いに研究が推進されたと思われる。その主要な記念論文は年代順に次のようなものがある: 畑井小虎教授退官記念論集(1973, 499p, 56 pls.)・菅野三郎教授退官記念論集(1980)・大森昌衛教授還暦記念論文集「軟体動物の研究」(1981, 369pp.)・高安泰助教授退官記念論集(1986, 310pp.)・野田浩司ほか編「日本産新生代貝類の群集特性」、瑞浪化石博物館専報 no. 6 (1986, 206pp.)・Kotaka, T. ed., Japanese Cenozoic Molluscs-their origin and migration-日本古生物学会特別号no. 29. (1986, 255pp, 21 pls.)・小高民夫教授退官記念論集(英文: 1988, 582pp+79 pls.)。

また化石図鑑や古生物学会が関与した出版物として次のようなものがある: 鹿間時夫「日本化石図譜」(1964, 朝倉書店, 287pp.)・森下 晶編「日本標準化石図譜」(1977, 朝倉書店, 242pp.)・藤山・浜田・山際監修「学生版日本古生物学図鑑」(1982, 北隆館, 574pp.)・日本古生物学会編集「化石の科学」(1987, 朝倉書店, 130pp.)・日本古生物学会編集「古生物学辞典」(1991, 朝倉書店, 410pp.) : 同第2版(2010, 576pp.) (図2)。



図2.日本古生物学会編「古生物学事典第2版」朝倉書店



【写真1】

今年は11月9日(日)の閉館までに23,628人の方々が訪れました。野外恐竜博物館は「展示場」、「観察広場」、「化石発掘体験広場」の3つのエリアからできていて、展示場以外は屋外にあります(写真1)。展示場は山小屋風の建物で、これまで現場から発掘された化石の一部が陳列されており、一番大きな標本は、恐竜の足跡のついた岩盤のレプリカで、5.7m×2.7mもあります。ほかにも、発掘調査の歴史年表や発掘された化石がどのように研究されるかを解説したパネル、そして第一次発掘調査からこれまでを映像で振りかえるコーナーもあります。空調が効いているので夏場でも涼めますし、トイレも完備されています。観察広場では、杉山川を挟んで向こう側にある発掘現場を間近に見られます。夏場の発掘時期には重機の槌の音が谷あいには響き渡り、全国から集った地質系の学生達が一心にハンマーを振るう姿を見ることができます。そして、化石発掘体験広場では調査区域の崖から運んできた石を自分たちの手で実際に割って化石の発掘ができます(写真2)。調査区域から持ってきた石なので、運が良ければ恐竜やワニの歯、カメの甲羅、魚の鱗など、これまで福井県が研究してきた貴重な化石を見つけることができます。

野外恐竜博物館の 開館とその概要

2014年7月19日(土)、福井県が25年もの間、発掘調査を続けてきた北谷の発掘調査現場を見下ろす場所に、「野外恐竜博物館」がオープンしました。



【写真2】

この野外恐竜博物館へは恐竜博物館発のバスツアーのみで行くことができます(写真3)。このツアーに参加するにはインターネットによる予約が基本ですが、来館時に当日申し込みもできます。所要時間は2時間程度。片道30分、現地に到着してからの観察、体験が1時間余りです。内訳は展示場が15分、観察広場が15分、化石発掘体験が30分となります。しかし、この野外恐竜博物館は現地と恐竜博物館を単にバスで往復するだけではありません。このツアーには「ナビゲーター」が同行し、バスの中や現地で案内をするなどの重要な役目を担っています。ユニバーサルスタジオ・ジャパンの講師から接客やエンターテイナーとしての心構えの講習をみっちり受けて、積極的なコミュニケーションを図りツアーを盛り上げる術を会得しています(写真4)。

自分のハンマーの一振りで見られる化石の独特の輝きには、何物にも代えがたい感動と喜びがあります(写真5)。そういう意味では化石発掘体験は野外恐竜博物館の一番の目玉ですが、ナビゲーターや野外恐竜博物館までの道中を含めたすべてがツアー全体を非日常空間にすることに一役買っています(写真6)。皆さんも野外恐竜博物館を訪れて楽しいひとときを過ごしてみませんか。

(2015年はゴールデンウィークから実施予定です。)

(一島啓人)

しゅっぱーつ!



【写真3】



【写真4】



【写真5】



【写真6】

マゼランの名がついた二枚貝

主任研究員 佐野晋一

厚歯二枚貝は、蓋付きの湯飲みや角、あるいは巻貝のような、奇妙な形をした絶滅二枚貝です(図1)。恐竜時代の白亜紀を代表する二枚貝の一つで、当時の熱帯・亜熱帯地域の浅海域に大繁殖していました。恐竜博物館では、常設展示室2階生命の歴史ゾーンの中生代の海コーナーに展示されています。私は、日本をはじめ、フィリピンなど、太平洋域から発見された厚歯二枚貝の研究に取り組んできました。今回は、フィリピンのセブ島で発見された、前期白亜紀終わり頃(約1億年前)の厚歯二枚貝の研究について紹介させていただきます。



図1. 巻いた殻を持つカプリナ科厚歯二枚貝カプリナ(福井県立恐竜博物館展示標本)。矢印は左右の殻の境界を示す。

厚歯二枚貝の研究では、二枚の殻をつなぐ蝶番部(歯)や貝柱(殻を閉じる筋肉)が付着する部分の形状を重視します。また、殻の横断面でみたときに蜂の巣状構造が発達したり、殻の成長方向に沿って溝状構造が発達したりする種類もいます。

セブ島の厚歯二枚貝は硬い石灰岩中に含まれているために、殻を石から取り出せないのが、露頭や岩石標本の表面に見える殻の断面をたくさん観察し、殻内部の立体構造を把握していきました。左殻の横断面(図2)には歯や貝柱が付く部分がわかります。また、殻の後ろ側に楕円から多角形の形をした数個の穴がありますが、これは、殻に単純な溝状構造があることを示しています。

さらに、左殻の歯や貝柱が付く部分の形状は、日本の北部陸中海岸や北海道の前期白亜紀後半(約1億2000万年前)の地層から見つかる、ポリコニテス科のプレカプロティナ(*Praecaprotina*)のものにそっくりです。しかし、プレカプロティナにはない溝状構造が発達しています。実は、後期白亜紀中頃(約9000万年前)以降には、ポリコニテス科に似ていますが、左殻に溝状構造を著しく発達させたプラギオプテクス科が地中海地域とカリブ海地域に栄えます。この科の起源はこれまでよくわかっていませんでしたが、セブ島産厚歯二枚貝はポリコニテス科からプラギオプテクス科への進化の一步を踏み出した、つまり溝状構造を発達させ始めた段階を示すと考えられます。その進化の舞台は太平洋域だったのかもしれませんが。

セブ島産厚歯二枚貝は今までに見つかった種類とは形態が大きく異なることから、新属新種を提唱する記載論文を今年9月に発表しました。生物の種名(学名)は属名と種小名の二つの言葉の組み合わせで構成されます。新しい種類だと考えられる生物を発見したときには、その特徴を具体的に述べ、写真や図で示した論文を学術雑誌や書籍に発表する際に、新種として命名することになっています。セブ島産厚歯二枚貝の属名は、大航海時代の

16世紀初めに、世界一周航海を初めて成し遂げたスペインの艦隊を率いたことで有名な、ポルトガルの航海者マゼランの名前にちなんでマガリャネシアと命名されました。マゼランの艦隊は、ヨーロッパから見て、新大陸(アメリカ大陸)の反対側にある大洋を「発見」し、この大洋を渡る航海の間に嵐にあわなかったことから、これを「太平洋」と命名したそうです。また、マゼラン自身は、航海の途中に、戦闘によりセブ島で命を落としています。マガリャネシアという名前には、太平洋の厚歯二枚貝相の重要性を象徴する存在であるという思いを込めています。ちなみに、人名にちなんで属名をつける場合、語尾に「ia」をつけるというルールがあります。マゼラン(Magellan)の英語表記にちなんでマゼラニア(*Magallania*)としたいところでしたが、この学名は既に現生の腕足類に使われていました。別な種類の生物に同じ学名をつけることはできません。そこで、マゼランの名前のスペイン語表記であるマガリャネス(Magallanes)にちなんでマガリャネシア・キャナリキュラータ(*Magallanesia canaliculata*)と命名しました。この種小名は、この貝の重要な特徴である溝状構造(pallial canals)を持つことを示し、従って種名全体では「溝状構造を持つマゼランの貝」という意味になります。

セブ島の石灰岩には、マガリャネシア以外にも、新種を含む、数種の厚歯二枚貝が含まれています。しかも、現在では北西太平洋域に分布する水深1000mより深い海山の上に発達した白亜紀の石灰岩から見つかる種類と同じものがあるようです。化石を丹念に調べ、謎を一つ一つ解き明かしていくことにより、太平洋域に隠されたダイナミックな生物進化の物語をひも解いていくことを目指して努力しています。

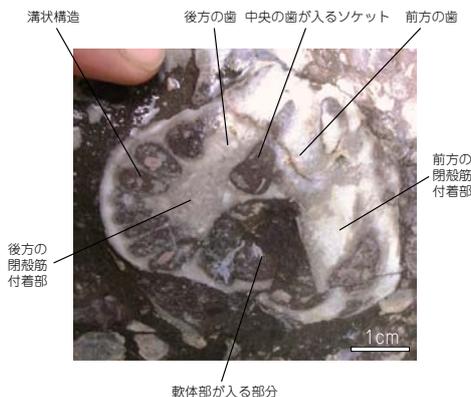


図2. マガリャネシア・キャナリキュラータ(左殻)の横断面写真(北海道大学大学院理学研究院 地球惑星システム科学講座の伊庭靖弘さん提供)

恐竜博物館のQ&Aから



Q 恐竜博物館をあまさず楽しみたいのだけど？



福井県立恐竜博物館は、2000年の開館以降たくさんのお客様をお迎えしており、福井県奥越前地域の名物スポットとして好評いただいています。県内は元より、近畿圏中京圏から、春の大型連休や夏休みにはまさに全国各地からお越しいただいています。

来館者からの感想でよく聞くのは「スケールが大きかった」「恐竜の数が多い」といったものです。確かに恐竜に着目してここまで標本を集めた博物館は世界でもあまり例がないでしょう。中には「見切れずに時間が足りなかった」という方もおられます。それもそのはず。展示室のおすすめルートをただ歩くだけで30分かかります。展示物には42体もの恐竜全身骨格をはじめ、千数百もの標本があります。それらとその展示パネルも見ることを考えると、観覧は1時間以上、館への出入りを含めると2時間程度の余裕をみておくことをおすすめしています。

来館者にとって当館は、数々の骨格が立ち並ぶという異空間です。非日常感が初めてお越しになる方の主な楽しみ方になってしまうことでしょう。しかし、さらに深く楽しむには博物館のサービスをご利用ください。そのひとつは展示解説員との会話です。職名の通り展示物に詳しく、それが展示される理由やエピソードなど、知的好奇心を刺激するお話ができることでしょう。もうひとつは音声ガイドです。有料レンタルですが、厳選された展示物の解説が聞けますので、効率よく恐竜博物館マニアになることができます。また展示解説書もご利用ください。

もしお越しになる前に疑問がありましたら、お気軽に電話やEメールでお問い合わせください。館内では受付窓口や展示解説員、係員にぜひお尋ねください。恐竜博物館ホームページも要チェックです。

カフェ&レストラン・ディノの イチオシ!

恐竜の巣カレー

900円
(税込)

カフェ&レストラン・ディノのオリジナルカレーは、25種以上のスパイスでじっくり煮込んだ料理長自慢の一品です。その中でこの恐竜の巣カレーは大人気。カレー皿が「恐竜の巣」に見立てられて野菜のベッドが敷かれています。その上に「恐竜のたまご」と「恐竜クッキー」がトッピング。たまごを見守る恐竜といったストーリーが思い浮かびます。ホットなカレーをほおばり、口休めにクッキーをばくり。これはベストマッチかも? カレーは甘口にもできますよ。ミニサラダがつくセットは1,060円です。



ミュージアムショップの オススメ商品から

恐竜博物館カレンダー 2015年版

1,600円
(税込)

恐竜博物館は、朝日印刷株式会社とコラボして、2011年版から毎年カレンダーを制作しています。第5弾となる2015年版は常設展示室1階「恐竜の世界ゾーン」に注目。やはり恐竜博物館の顔である恐竜骨格の展示を、最初のティラノサウルスのロボットにはじまり、獣脚類から鳥脚類へとゾーン内を順に展示を巡っているような写真構成としています。アングルやライティングにも凝った展示室の一面をぜひお楽しみください。11月1日から発売でショップの売れ筋商品ですが、館外店舗やAmazonでも販売していますよ。



ハブリックコース

博物館セミナー

地球と生命の物語

場所/研修室
申込/電話、FAX、E-mailにて

⑨ 中国留学と恐竜研究

日時/1月18日(日) 13:00～14:30
内容/中国吉林省の大学院で5年、そして四川省自贡恐竜博物館で2年半研究してきた経験をふまえ、中国で携わってきた恐竜化石とその研究成果を紹介いたします。さらに、中国の恐竜化石が世界の恐竜研究に及ぼす影響を考えます。
講師/関谷 透

⑩ 恐竜時代の福井のカメたち

日時/2月15日(日) 13:00～14:30
内容/福井の恐竜化石発掘現場からたくさん見つかったカメ化石。最新の研究結果をもとに、その重要性について、やさしく解説します。
講師/園田 哲平

連携博物館講座：四国南西部の地形と地質

日時/3月15日(日) 13:00～14:30
内容/四国南西部には、南海地震などによる隆起地形、日本列島形成を解く鍵となった四万十累層群、氷河期～間氷期の環境変化に伴う、堆積サイクルや周期的に変わる貝化石群集が認識できる唐ノ浜層群など、興味深い地形や地質が分布しています。これらの研究からわかることについて紹介します。
講師/徳島県立博物館上席学芸員 中尾 賢一 先生

ジュニアコース

博物館自然教室

場所/実習室
対象/小学生以上(小学生は保護者も参加) 20名
申込/往復ハガキ、E-mailにて

■恐竜は鳥?鳥は恐竜?

一恐竜と鳥の関係を知ろうー
日時/1月11日(日) 13:00～15:00
内容/現在では恐竜の一部が鳥へと進化していったことがわかっています。博物館の展示物や鳥の骨格標本から恐竜と鳥の関係を探っていきます。
担当/柴田 正輝

■なぞの恐竜を研究しようII

日時/2月8日(日) 13:00～15:00
内容/博物館には恐竜の全身骨格が並んでいますが、発掘現場では体の一部だけが見つかる場合がほとんどです。部分的な標本から、どんな恐竜のどの部分の骨なのか、一緒に考えてみましょう。博物館の展示の中に、答えがかかれています。
担当/関谷 透

■カメの甲羅をしらべよう

日時/3月8日(日) 13:00～15:00
内容/甲羅は何からできていて、中はどうなっているのでしょうか。身近だけど意外と知らない、カメの甲羅の構造や進化について、骨格標本や化石をつかって一緒にしらべていきます。
担当/園田 哲平

キッズコース

恐竜ふれあい教室

対象/4歳～小3の親子 15組
場所/実習室
申込/往復ハガキ、E-mailにて

■親子で恐竜パズルをつくろう!

日時/1月25日(日) 13:00～15:00
内容/恐竜のぬり絵がパズルになります。親子でつくって楽しみましょう。
講師/島田 妙子

■親子で化石のレプリカをつくろう!

日時/2月22日(日) 13:00～14:30
内容/石こうを使って、アンモナイトなどの化石の複製をつくります。
担当/千秋 利弘

■親子で恐竜だこをつくろう!

日時/3月22日(日) 13:00～15:00
内容/恐竜の絵をかいて恐竜だこをつくります。
担当/島田 妙子



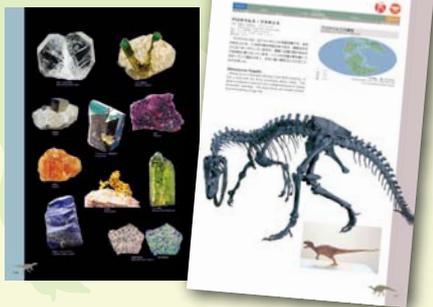
ギャラリートーク開催

当館研究スタッフが、展示標本を前に30分程度のお話をします。開催日時、集合場所等、当館ホームページのイベント案内をチェックして下さい。

福井県立恐竜博物館
展示解説書 販売中

福井県立恐竜博物館の展示解説書は、「恐竜の世界」「地球の科学」「生命の歴史」の三部構成で、それぞれ展示と対応した詳しい解説がなされています。子どもから大人まで楽しめ、かつ研究者にも適した、まさに恐竜博物館の魅力をあますところなく凝縮した一冊といえます。

10周年の展示リニューアルに対応した新版です。ぜひお買い求め下さい。



■A4 210ページ オールカラー
1,600円

注文方法

お求めの冊数、送付先住所を明記の上、代金と送料とを現金書留にて当館までご送付下さい。送料等のお問い合わせ、お申し込みは恐竜博物館まで。

